



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 經濟論叢 1942, 54(6): 714-714

ISSUE DATE:

1942-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/131679>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷四十五第

月六年七十和昭

論叢

條件統制と需給統制

文學博士 高田保馬

廣域經濟の貿易理論

經濟學博士 谷口吉彥

東亞資源論の課題

經濟學博士 蜷川虎三

葉適の貨幣思想

經濟學士 穗積文雄

研究

儲蓄銀行の課題

經濟學士 徳永清行

テニルゴの歴史觀

經濟學士 出口勇藏

民國に於ける外國銀行の發展

經濟學士 小寺武四郎

說苑

支那工業に於ける株式會社企業の位地

經濟學士 岡部利良

附錄

彙報

本誌第五十四卷總目次

彙報

經濟學部

本學部歐文紀要 (Kyoto University Economic Review) 第十七卷第二號は次の論稿を以て四月三十日刊行 (丸善發賣定價金壹圓)

The formation of "Japanese political economy."

Prof. E. Honjo

The trade policy of East Asia wider territory economy.

Prof. K. Taniguchi

The currency system in French Indo-China.

Prof. K. Matsuka

Notes.

經濟學會

四月例会 四月二十八日(火)午後六時より樂友會館に於て開催され次の報告があつた。

大東亞戰爭の世界史的意義

石川 教授

現代變革期における最も具體的な學問は、個人主義と全體主義の對立を超えるところの日本的にして同時に世界的な原理を有つものでなければならぬとせられ、その意味に於いて經濟科學たるわれわれの經濟學も哲學的な基礎づけを要求され

てをり、その上に於いてのみ展開されねばならぬと論ぜられた。かゝる日本的にして同時に世界的な原理は、「大家」の論理に他ならないとせられ、その根據を西田哲學に求められつつ、「個的多と全體的一との矛盾的自己同一」なる論理の歴史的な在り方を究明せられ、その體制とそれを擔ふ民族に就いて述べられ、最後に今次の大東亞戰爭の世界史的な意義は、全體主義と個人主義との對立を超える「矛盾的自己同一」の原理たる眞に日本的な「大家」の論理を世界に擴充し、以つて中世と近世を超える世界新秩序の實現に寄與する點に在ることとを論ぜられた。

出席者。石川、八木、柴田、中川、堀江(保)、中谷、穗積、徳永、靜田、白杉、田杉、出口の諸先生、青盛、岡部、金森、河野、島津、杉原、前田、松本、山崎の諸氏。

職員助陣